KYOKYO 121

特　集　連合教職大学院が発足します

京都教育大学

＜表紙＞

『おいしいラーメン』

附属京都小学校　２年　園　祐貴

ぼくは，図画工作の時間においしいラーメンを食べている人の様子を版画にしました。工夫したところは，顔や体の部分を一つひとつ大きく画用紙に描いて、はさみで切りました。それを台紙に丁寧に貼っていきました。難しかったことは，指のつめを一つずつはさみで切るのがとっても難しかったです。毛糸でラーメンの部分を作ったけれどそれを紙にボンドで貼るのもなかなか大変で，指がボンドだらけになりました。インクをつけて，バレンで一生懸命こすって、ゆっくりとはがすとラーメンを食べている人がきゅうにあらわれました。大変だったけれどうまくできて，とってもうれしかったです。今度は，もっと難しい版画に挑戦してみたいです。

National Institution for Academic Degrees and University Evaluation
NIAD-UE
UNIVERSITY
ACCREDITED
Mar. 2007

CONTENTS

広報第121号

＜表紙＞　附属京都小学校　２年　園　祐貴

特集

2　**連合教職大学院が発足します**
京都教育大学大学院連合教職
実践研究科設置準備室

TOPICS

6　**地域貢献・地域支援のための**
データベース検索方法

海外見聞録

8　**私のオランダ教育紀行**
理学科教授
村上　忠幸

留学生の声

10　**私の留学生活**
教育学研究科　学校教育専攻１回生
Lkhagva Ariunjargal
ルハグワ　アリウンジャルガル（モンゴル出身）

研究余滴

11　**「奇跡の人」の「卒業」**
発達障害学科教授
冷水　來生

京教今昔物語

13　**思い出すこと**
教育学科教授
矢野　喜夫

京教学内探訪

15　**附属高等学校40年**
～敷地と校舎の変遷～
附属高等学校教諭
井上　達朗

附属学校園だより

17　**アイデアで　エネルギー問題に挑戦！**
附属桃山小学校副校長
堀　　知泰

18　**創立60周年記念事業「ホームカミングデー」**
附属桃山中学校副校長
多羅間　拓也

19　**耐震工事完成**
附属幼稚園副園長
川端　智江

新任の先生から

20　**「家」「庭」があってこそ**
家政科准教授
延原　理恵

20　**教員養成から教職員教育のための大学へ**
教育学科教授
榊原　禎宏

20　**特別支援教育とユニバーサルデザイン**
附属特別支援教育臨床実践センター准教授
相澤　雅文

卒業生の声

21　**大切なのは「楽しむ」こと**
京都市立明徳幼稚園教諭
佐藤　菜々子

21　**『遊び』の大切さを学んだ大学生活**
神戸市立東灘のぞみ幼稚園教諭
岡崎　直子

ようこそ大先輩

22　**自然科学史の真実を探求して学ぶ教育**
京都教育大学同窓会理事長・名誉教授
松井　榮一

読者の皆さまへ・編集後記

23　地域連携・広報委員会委員長
武蔵野　實

連合教職大学院が発足します

京都教育大学大学院連合教職実践研究科設置準備室

平成20年4月から本学に連合教職大学院が開学します。正式名称は「京都教育大学大学院連合教職実践研究科」といい、京都教育大学を基幹大学とし、京都産業大学、京都女子大学、同志社大学、同志社女子大学、佛教大学、立命館大学、龍谷大学の7大学を参加大学として連合的に設置するもので、京都府教育委員会、京都市教育委員会とも密接な連携協力関係を持っています。

昨年12月はじめ連合大学院の設置計画が文部科学省に許可され、4月に開校することになりましたので、その概要についてご紹介します。

教職大学院の役割

平成18年7月に出された中央教育審議会の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では、－教員に対する揺るぎない信頼を確立するための総合的な改革の推進－という副題がつけられ、3つの内容が提言されました。その1は教職課程の質的水準の向上を図る対策として教員免許取得のための新しい授業「教職実践演習」が設定されます。その2が「教職大学院」制度の創設です。その3は教員免許更新制の導入で教員免許に期限が付けられ10年ごとに更新講習を受けることが必要になります。

教職大学院は、より高度な専門性を備えた力量ある教員を養成し、教職課程改善のモデルとなるものとして、専門職大学院の制度を拡張してつくられたものです。この大学院の目的は2つあり、一つは学部段階での教員としての基礎的・基本的な資質能力を修得した学生の中から、さらに実践的指導力を備えた、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員を養成することであり、二つ目は現職教員を対象に、将来、地域における指導的教員・学校管理者となる上で不可欠な「確かな指導理論と実践力・応用力」を備えた、スクールリーダーを養成するものです。

こうした新たな形態の大学院の制度が出されてきた背景には、現在学校で起こっている複雑で多様な教育問題に対し、的確に判断し実行できる若手の教員が必要とされていること、教育学部に設置されている教育学研究科の大学院がそのような教育課題に十分に対応できる教員を養成できていないことなどがあります。そのため、新たな教職大学院は法科大学院や経営専門職大学院のような専門職大学院として設置するように設計されていて、実践的な指導力を養成するために、最低必要教員の4割を実務家の専任教員－教職大学院の場合はもちろん学校教員や教育行政の専門家－で構成しなければなりません。また後の教育課程のところでも説明しますが、実習や授業の形態も従来の大学院とは大きく異なるものになっています。

連合教職大学院の特徴

来年度発足する教職大学院は19大学ありますが、本学に設置される連合教職実践研究科の一番大きな特徴は、私立7大学との連合でつくることにあります。

先に触れた中央教育審議会の検討内容はすでに2年半前の平成17年夏にはその概要が出されていましたので、教員養成を大学の最も重要な機能として持っている本学としては、早い時期から対応を進めてきました。その中で教職課程を持っている大学が京都には多数あり、実際多くの大学から小・中・高の教員が採用されていること、大学コンソーシアム京都が全国に先駆けて結成されていて大学間連携が進んでいることなどから、連合的に教職大学院を創設する意見が内外から出されてきました。平成18年1月には15を超える大学と協議を進め、京都府教育委員会、京都市教育委員会の参加も得ながら、連合に向けた協議を進めてきました。教職大学院の設置基準が早い時期に法制化されていれば、平成19年度に発足する可能性もあったのですが、実際には平成19年3月になってやっと基準が制定されたため、平成20年度発足が最も早いものとなりました。

連合で大学院をつくるといっても、国立大学法人と私立大学の学校法人とが共同出資して新しい学校をつくるといったことには大きな困難があります。何よりも大学院は収益性がありません。したがって、連合教職大学院は『京都の地にあって、京都の教育に貢献しようとする意志のある大学が集まり、それぞれの持つ「知的資源」を集めて大学院を設置することである』との合意に達して設置の方向が出されました。設置の形態は単純なものにして、これまで国立大学が進めてきていた連合大学院に近い形にすることになりました。つまり、京都教育大学を基幹大学となり、連合参加大学から教員を派遣してもらい連合大学院の専任教員として活躍していただくこととなったのです。

この連合教職大学院には、連合参加大学から教員を

派遣していただくだけでは有りません。京都府市の両教育委員会からも学校の中で中心的な活躍をしてきている現職の教職員を実務家教員として派遣していただきます。また指導主事で活躍中の方も、みなし実務家専任教員として、連合教職大学院の教育の一部を担当していただきます。

京都教育大学から8名（内実務家教員2名）、連合参加大学から7名（内実務家教員1名）、府市教育委員会から5名（実務家教員2名、みなし実務家教員3名）、合計20名がこの連合教職大学院の教員となるのです。

また連合参加大学の学生には、本連合大学院の入学に関して、特別推薦入試が設定されています。それぞれの大学で特徴のある学部教育を受けてきた若者が、連合教職大学院でお互いに切磋琢磨して優れた教員になることを目指します。

なお連合教職大学院の発足後は、基幹大学の本学と連合に参加する7大学、そして連携している京都府教育委員会・京都市教育委員会とで「連合教職大学院構成大学・連携組織代表者会議」を結成して、大学院の運営や重要な方針の検討を進めていきます。

学校で必要な力をつける3つのコース

連合教職大学院は実践的指導力のある若手教員と中堅スクールリーダーの養成のため、必要不可欠な3つのコースを設置しました。

第1は授業力高度化コースで、教員の中核的力量である授業力の向上を目指し、特に、教材開発力、授業構成力、少人数指導など多様な学級編成への対応力、教科の枠を越えた教科指導力、カリキュラム・マネジメント力、校種間を見通した目標と評価の分析力などを育成します。

第2は生徒指導力高度化コースで、教員の中核的力量である生徒指導力の向上をねらいとし、特に、子どもの諸課題を的確に診断・対応する力、教育相談・特別支援教育の力量、家庭や地域社会の背景を見据えた生徒指導力、学級経営力などを育成します。

第3は学校経営力高度化コースで、スクールリーダーとして主に学校の組織経営を担うことを期待される現職教員を対象とし、その経験や職能に応じた学校経営の実務的な力量の向上を図ります。このコースは現職教員のみを対象としています。

連合教職実践研究科の教育課程

科目	単位数	授業力高度化コース	生徒指導力高度化コース	学校経営力高度化コース
コース発展選択科目	3科目6単位	コース設置科目	コース設置科目	コース設置科目
コース必修科目	5科目10単位必修	授業における評価の実践と課題	生徒指導の実践と課題	教育改革と教育行政・学校経営
		授業力を高める授業研究会の実践	教育相談充実のための学校内外の連携	教育法規の適用と課題
		ICTを活用した授業の開発	スクールカウンセリングの実際とその活用法	学校経営の組織開発と課題
		現代的教育課題の教材化と授業実践	生徒指導充実のための学校内外の連携	学校評価と教員評価の設計と展開
		授業力高度化実践演習	生徒指導力高度化実践演習	学校経営力高度化実践演習
共通科目	5領域10科目20単位必修	教育課程の編成・実施に関する領域	特色あるカリキュラム開発と課題（2単位） 教育課程の評価とマネジメント（2単位）	
		教科等の実践的な指導方法に関する領域	魅力ある授業づくりの実践と課題（2単位） 多様な授業形態の実践と課題（2単位）	
		生徒指導・教育相談に関する領域	生徒理解の実践と課題（2単位） 不登校理解とその支援の実際（2単位）	
		学級経営・学校経営に関する領域	学級経営の実践と課題（2単位） 学校の組織構造と経営実践（2単位）	
		学校教育と教員の在り方に関する領域	現代社会と学校教育（2単位） 教員の職務と役割（2単位）	
教職専門実習	最大10単位必修	連携協力校における実習	教職専門実習Ⅲb（4単位） 教職専門実習Ⅲa（4単位） 教職専門実習Ⅱ（8単位） 教職専門実習Ⅰ（2単位）	

ユニークな教育課程

実践的な指導力を培うために、教職大学院の教育課程は設置基準で厳密に規定されています。卒業に必要な単位数は45単位で、本大学院は46単位以上としています。特徴的な授業の第一は、教職専門実習10単位で、主に学部卒院生が、連携協力校である公立小・中学校で実務経験を積み教職の実際について総合的に理解し、実践的指導力を高めるとともに、授業で学んだ知識や理論を実際に融合させることを目的にしています。

連携協力校は、教員養成に実績を持つ京都市と宇治市、城陽市の小学校6校、中学校3校です。大学院の専任教員と当該校の指導教員が協働してきめ細やかな指導をします。

なお、教職経験が豊富で十分な教育実践を積んでいる教員の場合は教職専門実習について2から10単位まで履修したものとみなされます。

第2の特徴的な授業は共通科目です。これは「教職コア科目」として、5領域10科目が設置され、教職の専門性を体系的・総合的に育成することを目的にしています。5領域は教育課程の編成・実施に関する領域 、教科等の実践的な指導方法に関する領域、生徒指導・教育相談に関する領域、学級経営・学校経営に関する領域、学校教育と教員の在り方に関する領域となっています。

学びのフィールドは大学と学校で、コアとなる共通科目の授業は、大学の講義での理論的整理、学校でのフィールドワーク、大学での事例研究やシミュレーション、学校での参与観察・実証授業など、理論と実践を往還して融合を目指そうとするものです。それぞれの授業はおよそ20人程度の少人数クラスで、研究者教員と実務家教員とがペアを組んで実施することも、従来の学部や大学院とは全く異なる斬新的なものとなっています。

共通科目20単位の履修に加え、各コースには5科目のコース必修科目と3科目以上のコース発展選択科目が用意されています。

コース必修科目は、各コースがねらいとする資質能力育成のためのコアとなる専門科目です。共通科目で身に着けた基本的力量をさらに伸ばしていきます。また修士論文に替わるものとして2年次後期に「高度化実践演習」を履修して、「高度な実践的指導力」獲得のための授業実践や課題研究を報告書としてまとめ、修了の認定が行われます。

コース発展選択科目は、主に本学の教育学研究科の教員が行う授業科目で、個々の院生がさらに発展させたい指導力獲得のために広く主体的に履修するものです。

履修上の特徴

全ての授業は午後から夜間に設定されていますが、午前中は共通科目やコース必修科目で設定されているフィールドワークを、連携協力校などの学校や教育施設に赴いて実施します。

大学院の標準修業年限は2年ですが、現職教員が履修しやすいように弾力的な履修形態を取ることができます。

夜間履修

午後6時20分から始まる6時限、8時から始まる7時限の授業のみを履修することで修了することができます。ただし十分な教職経験から教職専門実習10単位を履修したものとみなされるか、あるいは勤務校で実習をすることができる場合で、午前中に設定されている共通科目などのフィールドワークに参加することは必要です。

短期（1年）履修型

1年間フルタイムで授業に専念できる教員で、十分な教職経験から教職専門実習10単位を履修したものとみなされる場合は、申請により1年で終了することができます。この場合授業料は1年分だけとなります。

長期（3年または4年）履修型

働きながら大学院で修学する院生は「長期履修学生」制度を利用して、3年または4年で修了できます。この場合の授業料は2年分で、分割して納入します。もちろん夜間履修のみで長期履修型を取ることもできます。

教職への強い意欲を持つ皆さんの入学を

教職への深い理解と優れた資質をもち、これからの学校づくりの一員として活躍したいと考えている学生の皆さん、実践的な指導力や授業を展開する力を身につけ、責任感と使命感をもって、教育の場で中堅を目指す現職の先生方の連合教職大学院への入学を期待しています。

地域貢献・地域支援のための データベース検索方法

18年度までは、本学教員の持つ様々なリソースを地域のニーズに応えるという観点から概要を小冊子にまとめて配布していました。今年度から教員情報データベースを構築し、本学ホームページにて公開していますので、検索方法を周知させていただきます。今まで同様、講演依頼、教育相談等お気軽に声をおかけ下さい。また、共同研究・受託研究にもこの研究者情報をご活用下さい。

検索方法は

①京都教育大学のホームページ（http://www.kyokyo-u.ac.jp/）の［研究者情報］をクリックします。

②研究者情報のページで［研究者総覧］をクリックします。

③研究者総覧のページで、何も打ち込まずに［検索］ボタンを押すと、本学教員一覧表が表示されます。講演演題等お知りになりたい場合は、左端の詳細ボタンをクリックすると情報を得ることが出来ます。

連絡方法については

講演依頼、教育相談の候補者が決まりましたら、個々の教員の研究室電話番号をお教えしますので、企画広報課広報・情報グループ（075-644-8125）にご連絡下さい。

連携・支援にあたっての条件については

具体的条件については、教員とご相談ください。

具体的な連携・支援の活動が教員との間でまとまりましたら

必要な手続き・書類等については、「講演講師等派遣について（依頼）」をダウンロードしてご利用ください。ダウンロードはhttp://www.kyokyo-u.ac.jp/kouhou1/koushihaken.pdfより行ってください。

何か不明な点がありましたら企画広報課広報・情報グループまでご連絡ください。

京都教育大学地域連携・広報委員会
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話　075-644-8125
ｱﾄﾞﾚｽ kouhou@kyokyo-u.ac.jp
担当　企画広報課広報・情報グループ

私のオランダ教育紀行

理学科教授　村　上　忠　幸

1．オランダの教育、発見！

私がオランダの教育に注目したきっかけは、毎日新聞の「ひと」欄に掲載された「オランダの教育－多様性が一人ひとりの子供を育てる」の著者リヒテルズ直子さんの紹介記事であった。それ以前から、オランダという国については、ポルダー（干拓地）によって国土を造ったオランダ人の国民性に理科教育の立場から興味を持っていた。つまり、国土を造った人々の科学技術に対する意識や自然認識に興味があり、日本の理科教育に対する示唆が得られるのではないかと思ったからである。また、日本における「理科離れ」を考えたとき、科学技術文明の浸透した社会における「多様性」の欠如に着目していたので、「多様性」というキーワードには敏感になっていた。そのような状況にあった私にとって、オランダの教育の「多様性」にふれた記事はまさに的を射たものであった。その記事がきっかけとなり、それまでのオランダへの様々な思いが後押しをして、オランダ行きを決意した。2005年初夏のことである。ただ、オランダ行きの手がかりとなる知己は全くなく、そこで、思い切ってリヒテルズさんに電子メールを打って、オランダでの調査のコーディネートをお願いした。

初めてオランダの地を踏んだのは2005年9月のことであった。実は、オランダ行きについては、理科教育における具体的な課題が見いだせないままの渡航であり、行く前には「学ぶべきものがないかもしれない」という不安もあった。が、今はすごい国と関わりをもつようになったものだと思っている。その後、共同研究者や学生と2回にわたって調査におもむいた。そのたびごとに新しいオランダの姿が広がった。共同研究者や学生にとっても思いは同じだった。世界のなからオランダの教育を発見した思いがした。

2．ゴッホ、フェルメール、レンブラントとの出会い

デン・ハーグはオランダの政治の中心であり、国際司法裁判所がある都市として日本にも知られている。私はここを拠点として、ライデン、ロッテルダムなどの大学や学校などを調査してきた。ゴッホ、フェルメール、レンブラントらが活躍したのも17世紀のオランダとのことだが、その作品がアムステルダムやハーグにあった。私はフェルメールが好きだが、「青いターバンの少女（真珠の耳飾りの少女）」「デルフトの眺望」がハーグセントラル駅からほど近いマウリッツハイス美術館（写真1）に展示してあった。数年前に神戸で見た名画に再会できるとは思わなかった。しかも、今度はツーショットである（写真2）。ハーグの町中では日本人を見ることはほとんどないが、この美術館での日本人の密度の高さには驚かされた。

写真1　マウリッツハイス美術館全景

写真2　フェルメールの青いターバンの少女

3．ライデン自然史博物館・ナチュラリス、ライデン大学植物園

ライデンは大学の町である。ナチュラリスはライデン大学の動植物関係の標本などを一般に開放して展示するために、研究部門をもった自然史博物館として1998年に設立された。2004年のヨーロッパの博物館チャンピオンシップで1位を獲得している。

展示で驚いたのは、生物の生息環境を再現し、従来の標本的（静的）な展示に対して生態的な空間や行動がイメージできる動的な展示の工夫が随所になされている点であった。またこれまで見たことがない放置実験が行われていることに感心した。1年前から放置されたパンやケーキなど（写真3、4）が大真面目に展示されており、肉眼では見えにくいカビや菌などの微生物に対する理解を促す視点がうかがえ、示唆的で

写真3　放置実験1年

写真4　放置実験1ヶ月

あった。

ライデン大学植物園（写真5）は、植生が豊かな公園といった趣であるが、16世紀以降の世界中の植物を採取し、栽培していた。設備は古く歴史を感じたが、手入れは行き届いており学術的にも貴重な存在である。園内にはシーボルトやリンネにまつまる展示があり植物分類学の拠点として伝統を感じた。日本の固有種であるミカンも栽培されておりシーボルトが持ち帰ったとのことである。

写真5　ライデン大学付近の風車

4. オランダの学校

ひとつの国の教育を理解することは非常に難しいことである。PISAなどによってオランダや北欧の国々は、今日もっとも注目されている。私は、ある国の教育を理解する有力な手がかりは、授業を見ることだと思っているので、オランダでも学校訪問・授業観察を精力的に行ってきた。

オランダの小学校は、面白いことに児童・生徒が200人寄れば学校の設立が政府によって保障されており、実に多様で様々な教育理念に基づく学校が存在している。まさにこの点こそが、リヒテルズさんが著書で紹介された教育の「多様性」である。イエナプラン、モンテッソーリ、ダルトン、フレイネ、シュタイナーなど教職採用試験の穴埋め問題でしか聞いたことのないような教育思想（理念）が、なんとオランダでは自由教育（オールタナティブスクール）として花開いているのである（写真6）。私は、ふつうの学校から自由教育の学校まで幅広く訪問したが、当初、あまりの多様性に頭が混乱して眠れなかったことを覚えている。同行した共同研究者のなかでも現職の先生ほど私と同様な“症状”に陥ったとのことである。作家の司馬遼太郎は、オランダには世界でもっとも成熟した市民社会があるといっているが、このような教育の多様性はまさに成熟した市民社会によって支えられているのではないかと考えている。

写真6　イエナプラン小学校授業風景

5. 教育における新たな蘭学に

昨年11月には、リヒテルズさんとともにオランダの教員養成・研修に関わるサポート機関から3名の専門家が本学を訪れシンポジウム、模擬授業等を行ってくれた。その懇親会での席上、参加していた毎日新聞の記者さんに、私とリヒテルズさんとの出会いについて話したところ、「あの「ひと」欄の記事を書いたのは私です」とのこと－「今日のこの日があるのはあなたのおかげですね」と感激の対面となった。

オランダと日本の関係は、明治になって疎遠になってしまったが、あのままオランダとのつきあいが続いていれば、日本の今日はもう少しよくなっていたかも知れない－とは司馬遼太郎のことばである。私は、あらためてオランダを知り、オランダの教育が日本の教育になにかしら新しいものを示してくれるのではないかと予感しつつ、もう少しオランダとのつきあいを続けてみたいと思っている。

私の留学生活

教育学研究科　学校教育専攻1回生　Lkhagva Ariunjargal
ルハグワ　アリウンジャルガル（モンゴル出身）

京都に住み始めてもうちょっとで3年になります。振り返って考えると色々なことがありました。京都の日本語学校で1年間の日本語の勉強を経て、今の京都教育大学の研究生として入学することが出来ました。1年後に大学院に進学し、今に至っている京都での3年間です。

勿論、私だけじゃなくて、人間の野望というものは果てしないものだと思います。というのは私も皆さんと同じく、自分なりに大きい夢を持っているから京教にやってきました。（辿り着きました。）大学を卒業し、就職した職場を通じて、段々と格差社会になりつつあるモンゴルの社会に違和感を感じたのが、教育学を勉強するきっかけとなりました。世界中に誇る教育制度をもつ日本に日本の教育制度を学ぶ為に京都に来ました。日本で生活するには勿論生まれ育った環境、習慣等々が違う外国人留学生にとって、又私にとって簡単なものではありませんが、その難しさを利用して、ぶつかりつつある問題を少しずつクリアしていけば、留学生生活は面白くて、自分の夢に近づく道の一つだと思われます。

日本の社会で生活するために、私にとって一番大事なのは、人間コミュニケーションだと思います。同じ人間なので日本人とコミュニケーションをとるのは諸国の国々の人とあまり変わりませんが、日本人として独特なものがあります。それをちゃんと理解しないと、うまくいかないことをしみじみ感じたことがいくつかあります。例えば

「この間ありがとうございました。」 と言う友達に「えぇ…。何のことですか？」 と尋ねると、一ヶ月前に一緒にご飯を食べた時のことであったり、大分前にお話していて盛り上がった時のことであったりします。日本人は、再度会った場合にも以前の感謝を欠かさないことがあります。又、手紙やハガキで感謝の気持ちを伝えたり、相手が見えなくなるまで見送るなど、心を大切にしていることを、自ら学んでいくのが大切だと思います。

日本での生活はどんなに楽しくても、母国から離れて住んでいる私にはホームシックになる寂しい時も時々あります。その時に欠かさずすることは、小さい頃から好きだった読書です。寂しい時にはいつも詩を読んでいますが、残念ながら今の場合はほとんどモンゴル語です。本当は日本の詩も読みますが、難しくて母国語で読んで感じる感覚をどうも感じないです。たまに、俳句も読みますが結果は言うまでもありません。例えば、

一古池や蛙飛び込む水の音

これを読んでそれでなんですかと疑問が残ります。日本人が言うには、日本の生活、社会、風習が身にしみ込んでいれば解決できるらしいです…。

勉強を頑張りながら、面白く楽しく暮らして行こうと思う日本の社会です。自分の好きな詩を、日本の俳句を理解できるようになるまで頑張りたいです。

また、日本の桜は本当にきれいで大好きなので、桜の季節を毎年楽しみにしている私です。卒業まで、まだ1年あまりありますが、京都教育大学のみんなに、いつもの感謝を込めて「**いつもありがとうございます。これからも宜しくお願い致します**」でこの文書を終りたいです。

「奇跡の人」の「卒業」

発達障害学科教授　冷　水　來　生

「奇跡の人」について

教員免許法の改正に伴って、来年度から聴覚障害児教育の講義を担当することになった。出講先の大学では、一足速く昨年春から始めた。講義の最初に、映画「奇跡の人」を見せた。私自身は、中学生のときに町の映画館に見に行っている。映画など見に行ったことのなかった私であるが、聴力を失って行くおのれの境遇にこの物語を重ねる気持ちがあったのであろう。この白黒映画の印象は強烈であったが、それ以来一度も見る機会がなかった。井戸水のシーンで、サリバン役の女優が何やらすばやく手を動かし、ヘレン役の少女の手をその手に重ねさせていたことを覚えている。後年私は在外研究でアメリカに渡り、そこで約1年間アメリカ手話を学んだ。アルファベットを手の形であらわす指文字（finger spelling）も学んだ。帰国したある時、突然映画のあの場面を思い出した。サリバン先生の奇妙な行動は、"water" の指文字をつづり、それをヘレンの手に触れさせたのではないだろうか。それを確かめたいという気持ちもあり、私は図書館のSさんに頼んでこの映画のDVDを探してもらった。入手したDVDを見て、私の予想は確実となった。サリバン先生は、ヘレンの手に "water" と指文字を綴ったのである。それだけではなく、先生はあらゆる場面でヘレンの手に指文字を綴っていた。ただこちらの方は、私の記憶からは完全に脱落していた。私が手話や指文字があることを知ったのは、二十代半ばのことであるから、当時中学生だった私は見落としたのであろう。井戸水のシーンだけは心に留まっていたのだ。

さて、このヘレン役の若い娘は、ペギー・マーチといい、当時のいわゆるアイドル・タレントであった。時は60年代アメリカンポップス全盛のころであり、音楽が好きであった私は、アメリカから直接入ってくる曲をラジオで聴いていた。彼女は当時「若いってすばらしい」だの「星よりきれいなマリア」だのという歌を歌っていた。ところがこのアイドルが、映画ではガラリと変身し、迫真の演技を見せたのである。映画の中の彼女の姿は、アイドル・タレントの甘えは微塵も見られず、本格的なものであった。

サリバン先生役の女優も、目立たない地味な感じの女性であるが、ヘレンとの辛抱強い格闘を見事に演じている。また、全体としてここに描かれた事柄は、現在の発達や言語習得の理論に照らしても基本的には矛盾がない。この映画が製作されたのは1962年のことである。幼児の言語習得の研究は、1970年代前半に大きなパラダイムの転換があり、諸理論は塗り替えられる。にもかかわらず現在この映画を見て、陳腐な部分はほとんどない。おそらく、記録を尊重し、事実に忠実であろうとした姿勢があったからではないかと思われる。

先日、昭和38年の朝日新聞縮刷版を読んでいて、偶然9月20日付け夕刊第一面の「今日の問題」欄にこの映画の映画評を見つけた。現在の人権感覚からすれば稚拙ともいうべき表現がある。いわく「ヘレン・ケラーはすぐれた素質をもって生まれ、家庭的にも恵まれた環境で育った。三重苦という肉体的な障害から来た不幸なのだから、一般の身障者や非行少年とは事情が違う」とある。まず全体の論旨が不明である上、彼女は三重「苦」にあえぐ不幸な人と規定され、「一般の身障者」と峻別された上、なぜか非行少年と対比されている。この記事が書かれた時代的な背景を見ると、同じ月の16日付夕刊には、米アラバマ州バーミングハムで、15日日曜日に黒人の教会が爆破され、少女4人が死ぬとあり、当地では黒人差別廃止運動に反対する白人による爆破事件は40回以上発生しているとある。ジョーン・バエズの「バーミンガムの日曜日」という歌は、この事件を歌ったものだったのか。何れにしても、記念すべき記事に遭遇したものである。さらにネットで調べてみるとバーミングハムでは、4月にマーティン・ルーサー・キングJr.らが人種差別反対デモを行い、8月にはワシントンで彼らが組織したワシントン大行進が行われている。公民権運動の真っただ中であったのだ。この時代から現在まで、人類は幾多の経験をし、そこから幾ばくの教訓を得てきたのだろうか。そしてその答えは、今もなお風に吹かれているのだろうか。

「奇跡の人」の映画評はこの2ヶ月で他に2件あった。この映画に対する世の関心が高かったことを伺わせる。この他、近く公開されるという記事が1件、撮影挿話が1件あった。後者は、サリバン役の女優がフットボールのサポーターを巻いて怪我や打撲に備えたという記事で、下着姿の体にサポーターを巻いている彼女の写真が添えられていた。

「卒業」について

去年11月の、ある土曜日の朝、新聞に往年の映画

「卒業」の記事が出ていた。読んでいて、主人公を誘惑する、ミセス・ロビンソンを演じた女優の名に目が留まった。この女優は、あの地味で熱心な家庭教師、サリバン先生を演じた女優ではあるまいか。私はアメリカで買ってそのままになっていた、クローズド・キャプション字幕入りの映画「卒業」のビデオを引っ張り出した。アメリカには障害者法があり、障害者が、一般のアメリカ市民なら受ける利益が享受できない状態に置かれていることは人権侵害であり、差別であるとみなされる。聴覚障害者の場合は、情報から疎外されることがこれに該当する。したがって、テレビ放送や、市販されているほとんどすべてのビデオやDVDにはクローズド・キャプション方式の字幕がつけられている。クローズド・キャプションというのは、ビデオ信号の隙間に文字情報を挿入し、再生機を字幕表示モードにしたとき、その情報を画面に表示する方式である。必要のないときは字幕を消して見ることができる（これに対し、常時画面に字幕が表示され、消すことができないものをオープン・キャプションという）。テープを回しながら、ロビンソン夫人が出てくる場面を追っていく。主人公ベンジャミンが、夫人との最初の密会にホテルを予約する。夫人が遅れて部屋に入ってくる。現れたロビンソン夫人は、なんとまあ、あの謹厳実直なサリバン先生であった。

この場面で、「サウンド・オブ・サイレンス」の曲が挿入される。私たちの世代は、最初のアルペジオによる導入部を聞くと、次にＳ＆Ｇによる柔らかいヴォーカルが被さって来ることを知っている。聴覚障害がさらに進行した現在の私は、もう音楽を聴いてもメロディーが聴き取れなくなっている。しかし、ビデオを再生したとき、「サウンド・オブ・サイレンス」の曲は聴くことができた。次は「四月になれば彼女は」であるが、この方はもうまったく聴き取れなくなっていた。なぜこういうことが起きたのか、それは「サウンド・オブ」は好きな曲であったので、メロディーが記憶されており、その記憶の中にあるメロディーが、ビデオから聞こえてくる音の断片を補完しているからであろう。概念駆動型情報処理の一例である。一方「四月になれば」のほうは、好きではなかったので、まとまりのある旋律として長期記憶に貯えられておらず、検索ができなかったのであろう。

この映画を最初に見たのは、大学に入ってからである。今はない学寮のはずれを坂下に降りていくと、渋谷の町に出る。当時は西武百貨店Ｂ館の横に2、3軒映画館があり、少し古くなった映画を3本立てなどで上映していた。ここで意に添わぬ大学生活を補填するかのように、映画を見た時期があったのである。

結局この映画は、何が言いたいのかよく分からなかった。主人公は名門大学を卒業したてのエリートという設定になっているが、かなり老けて見え、留年を繰り返したような感じだった。また画面は真夏である。私はアメリカの大学は夏が卒業であることを知らなかったので、春の卒業から夏まで、いい若者が無為にぶらぶらしているという想念の湧出を禁じることができなかった。そして何よりも、母親と愛を交わした若者が、その娘を好きになるという心理状態が理解できなかった。ましてや、その罪の意識もなく娘の結婚式に乗り込んで、花嫁を奪っていく気にどうしてなれるのか、理解できなかった。

「卒業」後のこと

映画「卒業」の新聞記事を読んでまもなく、朝のTVでドイツのコマーシャル・フィルムが紹介された。シルエットが多くて顔などがはっきり見えないのであるが、映画と同じ教会で、男が花嫁姿の若い娘をさらっていく。乗用車に乗って逃げる場面。ここではじめて運転席の男は、主人公を演じた俳優、ダスティン・ホフマンであることが分かる。彼と花嫁の関係はまだ分からない。花嫁が、「パパ、ありがとう」という。男はこの言葉を聞いて破顔一笑し、「ママの時は何たらかんたら」という。往年の映画を知る視聴者は、ここで事情をほぼ理解する。この花嫁はベンジャミンの娘であり、あの時さらって逃げた花嫁との間にできた子であって、この子がまた意に染まない結婚式を挙げる羽目になって、父親がドイツ製乗用車で助けに来たのだ。スチューデント・パワー世代の中高年にこのような推理をさせて悦に入らせ、一瞬過去への郷愁を呼び起こそうという仕掛けであった。私自身は「うは」と悦に入ったので、仕掛けは成功したと思う。ただ、対象となる世代が限られている上、テーマが特殊なので、乗用車の売り上げに貢献するかどうかは疑問であろう。

おわりに

故（ふる）きを温（たず）ねて新しきを知る。古い新聞も新しい知識の宝庫である。宣伝にも教えられることは多い。井戸水をくみ上げるポンプの宣伝があり、昭和38年当時は東京都内でも上水道は完備していなかったのだと悟る（縮刷版は東京版である）。白子さん、黒子さんのロゼット洗顔パスタの宣伝もあった。白子さんは黒子さんに、漂白には酸化漂白と還元漂白があり、ロゼット洗顔パスタは硫黄を使った還元漂白のクリームであると説明している。なるほどそうだったのか。何事にも関心を持ち続ければ、また一つ知識が与えられる。

思い出すこと

教育学科教授　矢　野　喜　夫

私が教育学科心理学教室の助手に採用してもらって本学に就職したのは1970年代の半ばですから、もう在職30年以上になります。よくそんなに長い間、いさせてもらったものだと思います。あっという間の30数年ともいえますが、というよりむしろ、さまざまな変化のあった長い道のりをはるばるやって来て、過去ははるか遠くになったという感じがしています。

目下、研究棟の建物が改修工事中ですが、それらの建物もまだ新しかった時代でした。現在グラウンドの陸上競技場のところには、かつて木造校舎があって研究室や教室もそこにあったそうですが、私が赴任したときには、それはすでになくなっていました。しかし、構内のあちこちに木造建物がいくつかまだ残っていました。西門に通じる通りのメタセコイア並木の向かいには、当時木造校舎の建物があり、それはクラブ・ボックスになっていましたが、一部に鉄格子窓のある建物があり、それはかつてここが軍隊の施設だったときの営倉（拘留所）だったところだと言われていました。その向かいのメタセコイアの並木も、今は亭々とした大木の並木になりましたが、30年前はもっと低く平凡な並木でした。

また、正門を入って右手の現在の講堂の場所には、1メートルくらいの高さのコンクリートの構造物があって、その上に木造の建物があり、倉庫になっていて、その一角に教職員組合のボックスがありました。そのコンクリート構造物は半地下で地中に埋もれていて、それは軍隊時代の弾薬庫だと聞きました。私は、本学に就職してまもなく教職員組合の代議員をさせられ、その組合ボックスに、会議で行ったことを覚えています。講堂前の楠の大木は今は「この木何の木」の木か、「となりのトトロ」に出てくる木のように大きく立派な美しい木ですが、当時はそれほど目立つ木ではなかったように思います。

現在の講堂前の楠

高校生で本学のオープンキャンパスで来たとき、正門を入ってすぐに見えるこの楠の大木を見て、本学を受験することに決めたと、入学後に言った学生がいたという話が以前ありました。私は木が高く伸び、鬱蒼と茂っているのが好きですが、本学は樹木が多く、四季折々の変化を見せてくれるのは、たいへん気に入っています。だれが冗談で言ったのか、本学は全国で、北海道大学に次いで2番目に緑の多い大学だ、という俗説もあります。それを利用して、本学を野外ミュージアムとして整備してもらっていますが、さらに言えば、植物園大学として整備してもらいたいと思います。そのためには樹木だけでなく、英米の大学のように地面の芝生や花壇も養成してもらえたらと思います。

北隣りの国立京都病院（現京都医療センター）は戦前には陸軍病院で、本学の軍隊の敷地内にあって地続きで、現在と反対の本学側が正面だったと聞きます。京阪電車藤森駅近くの聖母女学院や、深草駅近くの龍谷大学のところも、かつての軍隊の土地で、本学とは今でも地下通路でつながっているのだと言われていました。大亀谷大山町の現在の附属特別支援学校の場所も、軍隊の射撃練習場だったそうで、戦時中召集されて本学の地の連隊に入隊したとき、射撃練習にそこに行ったと言われた先生もいました。現在、農場・環境教育センター、国際交流会館、男子・女子寮、附属高校のある深草越後屋敷町の第2キャンパスも、かつて陸軍の輜重部隊のいたところだと聞いています。

現在でも唯一残っている戦前の軍隊時代の建物は、講堂裏手にある煉瓦作りの洋館の職員会館で、これは、軍隊時代には連隊長室で、戦後進駐軍が駐留していた時代には、進駐軍の将校クラブだったと聞きます。もともとこの建物も、現在と反対の南向き道路方向が正面入り口だったそうです。この建物は正門の近くにありながら、講堂と樹木の陰に隠れているので、知らない人も多いようで、そんな施設があるとは在学中はちっとも知らなかったと言った卒業生がいました。

私が本学に来たころは、今と比べればのんびりしていて、やはり古き良き時代だったと思います。学生は

現在の職員会館

構内でよくあいさつをしてくれました。本学は最近まで、学生が教員にあいさつをする美風があり、それは良い伝統だと思っていましたが、最近はその伝統も忘れられて、かなり廃れたのは残念です。

Ⅰ類といっていた小学校教員養成課程の学生は、1回生の夏休みに入った7月に、天ノ橋立に水泳訓練に行っていました。学生を泳力別に10数班に分け、各班に体育学科や水泳部の上回生の助教が水泳指導につき、各学科から出てきた教官が監督につくという形で、4泊5日だったか5泊6日だったかの間、いわば臨海学校をしていました。それは小学校専門科目体育の水泳授業の単位になる行事で、その目的は、泳げないかなづち教師をなくすことと、小中学校の臨海学校の指導法を学ぶこと、それと同時に、現在の新入生の合宿研修のような親睦の意味を持っていました。私は就職してまもなくその水泳訓練に行き、その後学年担任が回ってくる4年に1度行っていました。それはちょうどオリンピックの年で、オリンピックの年になると、今年は水泳訓練に行く年だと思ったものです。今年はオリンピックの年なので、7月になるとまた水泳訓練を思い出します。

最初に水泳訓練に行った年に私は、級外の一番泳げない女子ばかりの班の担当になりました。その班で、海での水泳訓練の合間にみんなで砂浜で休憩しているとき、体育学科のある先生が見回りに来られて、「この班は男、君一人か」と言われたのを覚えています。一瞬どういう意味かわからず「はあ」と答えましたが、しばらくして、私が男子学生に間違われていることに気づきました。私は幸か不幸か、昔も今もたいがい歳より若く見られますが、その当時は学生たちとも干支一回りくらいしか離れていなくて、学生と見間違われるのも無理はありませんでした。

水泳訓練中にちょうどプロ野球のオールスター戦があり、宿のテレビで教官がみんなそれを見ていました。最初に水泳訓練に行ったその年だったと思いますが、広島カープの山本浩二と衣笠祥雄がオールスターに選ばれて出て連続ホームランを打ち、2人が次々と塁を走って回るのを、宿のテレビで見たことを印象深く思い出します。

学科・教室の関係では、かつて心研旅行と言って、心理学研究室の教官と学生で合宿研修旅行に行く慣例がありました。そのために、心理学専攻の学生たちは会計係を決めて、毎月積立金を積み立てていました。その後、それは教育学科全体で行く卒業旅行になり、水泳訓練と同じように4年に1度、学年担任として卒業旅行で、全国あちこちについていくことが続きました。それと同時に、全学的に学科単位の在学生の合宿研修旅行の交通・宿泊費補助制度が始まり、教育学科では学科全体の2回生で合宿研修旅行に行きました。学科の卒業旅行はそのうちに、学生たちが大勢の団体旅行にあまり行きたがらなくなり、どうせ卒業旅行に行くなら、親しい友だち数人で行くほうがいいと言うようになり、学科の卒業旅行はなくなりました。

今はなくなりましたが、当時は心理学専攻学生の自主ゼミや研究会活動があって、これは他大学の学生心理学研究会との交流もあり、活発でした。その点では、今より昔の学生のほうが勉学意欲が高く、同学同志としての連帯感も強かったように思います。

本学はいわゆるピーク制という、学科の専門性が高い入試・学科所属制度を採っていて、Ⅰ類と呼ばれた小学校教員養成課程でも、他の教育養成系大学・学部のように教員養成課程一括で入学せず、各学科に分かれて入学し、アカデミックな専攻専門教育を受けて卒業していました。その伝統は今も残っていますが、学科の専攻専門性がだんだん弱められ、教員養成課程としての共通教育が増えてきたのは、それなりの理由や社会的要請があってのこととは言え、残念です。

本学の教育・研究は，とてもアカデミックではあるが学問至上主義には陥らず、具体的な子どもや学校教育現場との距離が近い形でのアカデミズムであることは、非常に健全だと思ってきました。本学の特色あるアカデミズムの伝統を今後も絶やさず、発展させていってほしいと念願します。

附属高等学校40年
～敷地と校舎の変遷～

附属高等学校教諭　井　上　達　朗

平成19年1月に附属高等学校本館（南館）の耐震工事が完了して1年余りになります。本館壁面の新しい塗装も、最初はなじめない色でしたが、今は落ち着き、耐震改修がなかった特別教室棟（北棟）の古ぼけた校舎の色と奇妙なコントラストを見せています。耐震補強のためのブレース（筋交い）も筆者の予想よりは窓からの視界を遮るものではないように思います。附属高等学校（以下、高校）の校地や校舎に大きく変化があったのは6回くらいかと思います。1回目は創設初年、2回目は現在の校地での校舎建設、3回目が現在の運動場の整備、4回目が体育館建設、5回目がメディアセンター建設、そして6回目が今回の耐震補強です。今回は高校創設時、現在の高校の校地への移転時、そして耐震工事後の現在の校舎の様子を中心に紹介したいと思います。

昭和40年4月に開校した高校は、附属京都中学校の現在の校舎が新築されたために不要となった旧校舎を利用して発足しました。旧校舎はもとの京都府師範学校の校舎の一部で、【写真1】でわかるように木造平屋建て、石炭ストーブが暖房具でした。その校舎は現在の京都中学校の体育館の東側の、京都府立鴨沂高等学校グランドとの間の塀に沿って建っていました。鉄筋の新しい校舎の中学校と古ぼけた高校の校舎という対照的な取り合わせの生活が1年間続きます。その間にも、『附高二十年史』（1985年3月刊）によれば、「玄関がもぎとられ、雨天体操場も一部切断」という状態で仮住まいの1年でした。写真の奥に見えている

写真１　京都中学校にあった旧校舎

写真２　特別教室棟の工事

のが現在の京都中学校の校舎です。

昭和41年4月に現在の校地に移ります。もとは陸軍第一六師団の物資の補給などの任務にあたった輜重隊の敷地跡で、第二次世界大戦後アメリカ軍に接収されていたところです。この校地にまず完成したのは特別教室棟（北棟）で、この棟のみで10学級の授業をすること、研究校としての公開授業に耐えうる広さを確保することが条件でした。ただ、3階の建物では9教室しか確保できないため、本館への通路と生徒関係の部屋を利用して10教室を確保したとされています。【写真3】は現在の校地への引越作業中のものですが、手前に伸びている2階部分が1教室にあてられました。この時点では、現在のメディアセンターの建っているあたりにアメリカ軍が兵舎として使用していた建物が、さらに校地の東北の隅には事務局長官舎が残っていました。また、体育館はなく、グランドにあたる場所は瓦礫が散乱している状態で、施設全体を見ると全く不十分なままに学校が運営されていたことがわかります。

写真３　仮校舎から本校舎へ

昭和42年になって本館（南棟）が完成し、ようやく15の普通教室がそろい、体育の授業を除いては通常の教室で授業が行われることになりました。特別教室も含めて教室の構造が一般的でないのは、廊下が吹

きさらしになっていることでしょう。教室の実質面積を増やすためといわれています。ただ、風雨が強い場合には廊下の移動中にぬれることもあり、また、上の階の廊下からの漏水も気になるところです。建築も40年を過ぎて漏水も目立っていたのですが、今回の工事の一環でそれも改修されました。もう一つ、多くの学校と違う点は教室の廊下側のガラスが透明である点です。これはいつでも授業を公開しているという創設以来の考えを反映していると考えています。

校舎の耐震に関する強度測定では1年早く建設された特別教室棟は安全で、本館のほうが補強が必要とのことでした。現在進行中の大学構内の耐震補強工事では建物内への立ち入りは禁止されていますが、高校の耐震工事では授業のために本館5教室はいつも使わねばなりませんでした。工事の騒音、週単位で使用教室が変更されるという生活が半年間続きましたが、【写真4】のように補強が完了しました。新営工事同様とはいきませんが、二足制移行とも相まって美しい校舎となりました。

写真４　耐震工事完了後の校舎

ところで、高校には第一六師団の輜重隊の痕跡が一つ残っています。【写真5】はメディアセンター近くの大きな楠の下にある高さ60cmほどの石碑で、表には「大正一三年一月二六日 御成婚記念」、裏には「大正一三年度第一期 輸卒 助教一同」と刻まれています。摂政時代の昭和天皇の結婚を記念して輜重隊の輸卒（二等兵よりも下級に位置づけられた兵士）と彼らを指導した軍曹（小隊長を兼ねた教官を助けて助教と呼ばれました）らによって建てられたものです。日本の軍隊では物資補給にあたる輜重の役割を非常に軽視していました。士官だけでなく兵も一段下に見られていたのです。当時は軍縮の時代でしたから、余計に低く見られたかもしれません。

写真５　輜重隊の兵卒や下士官が建てた摂政宮の成婚記念碑

伏見は第一六師団司令部が置かれた土地として有名ですが、次第にその遺跡は少なくなっています。高校の校地にも学校の歴史をたどるだけでなく、それ以前の歴史をたどることができる遺跡が残っています。

アイデアで　エネルギー問題に挑戦！

附属桃山小学校副校長　堀　知泰

本校がエネルギー教育実践校として取り組んで3年目になりますが、子どもたちがアイデアを出しながら挑戦しているその成果が、少しずつ見えてきて、子どもたちの励みになっています。

学校賞受賞！
「地球となかよし メッセージ2007」（教育出版主催）

学校賞は、4年生と6年生がエネルギー環境教育の取り組みの一つとして応募し頂いたものです。左図の6年生の作品には、次のようなメッセージが添えられています。

「『コップの中の地球』お茶を飲もうとコップにお茶を注いで氷を入れると、必ずと言っていいほどピシリと音を立てます。そしてその後は、ゆっくりと氷が溶ける。この様子を見て私は思いました。氷を地球と置き換えてみようと。ピシリという音は、地球がもう限界というサイン。後は地球が壊れていくだけ。今地球のサインは出ているかも知れません。もう遅すぎるかも知れません。だけど何もやらないで遅いなんて言うのは間違っていると思います。…」

このような作品づくり（発信）を通して、日常生活における実践行動に結びつくよう考えていかなければならないと思っています。

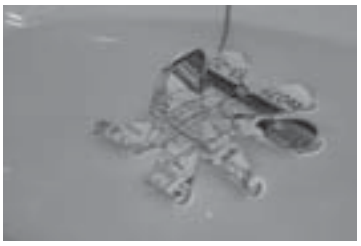
第4回エネルギー活用作品コンテスト開催（本校）
最優秀賞受賞「パラシュート付きペットボトルロケット」（本校6年生）

この水ロケットは、70mも飛び、頭部に付いた落下傘でフワリフワリと降りてきます。発射部との接合部にカチットを使った工夫などもしてあって見事に最優秀賞を得ました。チャレンジ4回目で得た栄冠です。

優秀賞「シャボン玉製造器」（本校5年生グループ）

これは、手回し発電機や太陽電池を使ってシャボン玉を作るという発想が、審査員の喝采を浴びました。シャボン玉が次々と出来ていく誠に夢のある楽しい作品でした。

アイデア賞「花がさく」（本校1年生）



新聞紙で花びらを作り、それを折りたたんだ造花ですが、水に入れると花びらがゆっくりと開いていくのです。素晴らしいアイデアでした。

このコンテストは、応募96点（8校）の参加の中、80点ほどが本校の参加です。その意味では、もっと宣伝をして、多くの参加を望みたいところです。

優良賞「パッチン空気でっぽう」（本校1年）

楽しんで作品作りをしながら、その中で出てきたアイデアは、子どもたちの中で消えることなく温められ、成長し、やがてエネルギー問題を考えていく拠り所となるのではないでしょうか。

エネルギー教育賞　優秀賞受賞

各学年でテーマを決め取り組んできた3年間のエネルギー学習が、評価され嬉しい限りですが、私たちの取り組みは、まだ緒に就いたばかりです。さらなる前進を目指します。

創立60周年記念事業「ホームカミングデー」

附属桃山中学校副校長　**多羅間　拓　也**

本校は、昭和22年に京都師範学校女子部附属中学校として誕生し、今年度は創立60周年となります。そこで、創立60周年記念事業の一環で、11月3日（文化の日）にホームカミングデーを開催し、卒業生、旧教職員と、在校生徒との交流の機会を持ちました。ちょうど昨年度、本校の本館校舎（昭和38年建設）が、耐震補強を伴う大幅機能改修がなされたこともあり、リニューアルされた校舎のお披露目をかねて、多くの方に本校の現況を伝えることも目的にして取り組みました。

全体会では、現在本校が取り組む教育活動を映像で紹介したあと、3年生有志による「大地讃賞」の合唱、音楽部による演奏と合唱、生徒代表による英語のスピーチ、帰国生徒による海外体験のスピーチがありました。そして全体会の最後には、法然院貫主・梶田真章氏（第24期卒業生）に、「ともに生きる ～戦争をなくすために～」と題した記念講演をしていただきました。ウイットに富んだ穏やかな語りの中に、生きるヒントがぎっしり詰まった講演でした。

全体会後は、希望者にたいして屋上緑化の施設公開があり、その後5つの分散会が開催されました。第1分散会は、家庭科調理実習室を会場にして、料理旅館「清和荘」当主・竹中徹男氏（第31期卒業生）による「京の食文化」についての講演でした。多くの調理器具や食材等を用意され、調理の実演を交えた、熱のこもったお話でした。第2分散会は、理科実験室を会場にして、鯉師（金沢養鯉場経営者）・金沢直輝氏（第46期卒業生）による、「価値を見いだす ～養鯉の愉しみ～」と題した講演でした。実際に大変高価な鯉を複数持ち込まれ、それを参会者が見たり触れたりしながら、興味深いお話をうかがいました。第3分散会では、「こうして見つけた！～やりたいこと・進みたい道～」をテーマに、現在大学生である5名の卒業生に、自分のやりたいことや進みたい道を、どのように見つけ、拓いてきたかについて、在校生を前に語ってもらいました。第4分散会では、「海外体験の意義を見直す」をテーマに、4名の帰国生徒学級卒業生から、帰国・外国人生徒たちにたいして熱いメッセージを送ってもらいました。第5分散会は、「ディベート教室」で、現1・2年生のディベート交流試合に、3年生や卒業生が、ジャッジ、審判、指導助言者として関わる、ディベート交流の会でした。以上、5つの分散会はどこでも、在校生は卒業生との交流を通じて大変多くを学んだようでした。

このホームカミングデーでは、卒業生にたいして、在校生徒の活躍を示すパネル展示や、生徒が国際交流用に作ったビデオ作品の上映などのほか、同期の方々のミニ同窓会用に場所を設定するなどしました。また、当日は旧教職員や保護者も多数参加されたこともあり、いろいろな意味で実りの多い会になりました。そして、何より、本校の持つ家庭的でおおらかな校風の良さをかみしめるとともに、伝統ある附属桃山中学校のすばらしさを改めて再確認することが出来ました。

梶田真章氏の記念講演

竹中徹男氏の講演

金沢直輝氏の講演

帰国生徒学級卒業生たちとの交流

耐震工事完成

附属幼稚園副園長　川　端　智　江

2学期から、隣の中学校グランド角に建てられた中学生が使っていたプレハブ教室を園児用に改装して、保育が始まりましたが、仮設トイレや手洗いなどすべてが大人仕様でした。子どもたちが少しでも快適に過ごせるように、ステップを作って置いたり、出入り口には屋根がないので大学の共済でテントを借りて建てたり、水道の代わりに手水鉢を置いたり、ウサギの赤ちゃんをもらってきてウサギ部屋で飼育したり、子どもと生活をしながら環境を整えていきました。

中学校の土手で虫採りをしたり、ドングリ拾いをしたり、グランドが空いているときには、ドン・ジャンケン、大玉転がしやかけっこをしたりなど授業の邪魔にならないように気を使いながら侵出していきました。中学生が「園児の食生活を知る」ためにと、お弁当を一緒に食べたり、聞き取り調査をしたりして、授業での交流もできました。“こどもうんどうかい”は雨天のため、小学校の体育館でしました。行事の変更もいろいろありましたが、例年にはない楽しい経験もあり、不便な中でも子どもたちはたくましく新しい生活に適応していきました。

工事が予定よりも早く進み、12月初めに引っ越すようにといわれたときには、プレハブ生活にやっと慣れたのに…。工事の囲いがとれて新しい園舎が現れると、そんな思いが吹き飛び、子どもたちと一緒に荷造りにとりかかりました。5歳児は自分たちでままごと道具を段ボール箱に詰め、開けるときには「われもの」と書いた箱を探していました。

長年の課題であった雨が降ると濡れてすべるテラスに屋根が付き、ウッドテラスになりました。同じ面積なのに、各保育室にもう一つオープンルームが出来たように広く感じられます。子どもたちは新しいテラスを走り回り、数人しか保育室に残っていません。3歳児はフロアーカーで走っています。木が落ち着くまで、たくさんの足で踏まれた方がいいそうで、保護者の方にも耐震工事完成の施設見学会をしました。1月に延期になった入園選考でも多くの親子に踏んでもらいました。

トイレも新しくなりました。子どもたちは、上を向いてトイレに入って行きます。3歳児のライトが花に、4歳児は天井にイルカやクジラが泳いでいます。5歳児は星や月が輝いています。手洗いは手水鉢ではなく、自動で水が出てきます。しばらくトイレから出てこない子どももいました。ライトも自動になったのですが、子どもがブースで座っているとセンサーにかからないようで、使用中にライトが消えて泣き出した3歳児がいました。男児の便器もセンサーに子どもの体がかからないので、使用後の水が流れません。「おしっこしてる間、ここに手を当てておいてね」と新しいトイレの使い方を教えています。

工事に伴って元副園長の記念樹のトウオガタマを移植しました。根付く確率は低く、心配しましたが新芽が出てきてホッとしました。

保育棟がきれいになると、築40年の遊戯室や管理棟の老朽が目立ってきます。「こっちも綺麗になるといいのにね」と話しています。

「家」「庭」があってこそ

家政科准教授　延　原　理　恵

平成19年4月1日付けで、家政科に着任致しました。専門領域は住居学です。大学を卒業した時点では「家づくり」のプロになりたいと思っていて、建築士の資格まで取得したのですが、「住」のもつ力の凄さを幾度となく見せ付けられるうちに、それをひもとくことに夢中になっていました。震災で壊れた家とその中で亡くなった方々、事故や疾病と住環境との関係・・・。図面上のたった一本の線が、人間の動きを変えることもあります。

学生時代は教員養成課程で教えることになろうとは、夢にも思っていませんでしたが、今では住教育の可能性の大きさを感じています。とくに、京都の地で住教育に携わることの意義を考えながら、教育、研究に精進していく所存でございますので、ご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

教員養成から教職員教育のための大学へ

教育学科教授　榊　原　禎　宏

どんな教員養成がのぞましいか、とくに小学校教員が「理論と実践」の力を持つように大学はどうあるべきかは、基本的な問いであり続けた。それは、かたや旧師範学校、もう一方に旧帝国大学、高等師範・文理科大学を母体とする「二種類の教育学部」にひとつ現れている。こうした中で、「熱心に教員養成に取り組まないことがいい教員養成だ」という論理的状況もかつては見られた。

そして近年にいたって、ようやく「実践的指導力」をキーワードに一つの決着がついたように思われる。それは、実践的に優れた教員を養成すること、そこでは知識・技術と合わせて自身をマネジメントできる振り返りの力が伴うように促すこと、が重要というものだ。猛進型の実践ではない、メタ認知の優れた教員が求められるゆえではないだろうか。

今後、学校という組織的な場を活かすために、教授－学習活動に直接は携わらない職員への教育が重要になるだろう。管理職や事務職など、教育実践にとっていわば後方支援を担うスタッフと教員との連携、相乗効果があってこそ、学校は存在意義を高めることができる。教員だけを対象とするのではなく（「教員養成大学」に留まらず）、学校教育に関わる幅広い人々にとっての場ともなれるよう、母校でもある本学で微力を尽したいと思う。

特別支援教育とユニバーサルデザイン

附属特別支援教育臨床実践センター准教授　相　澤　雅　文

初めまして。特別支援教育臨床実践センターの相澤雅文です。1月に着任しました。着任前は、仙台市に住んでおり、小学校や国公立の養護学校（特別支援学校）の教員、発達相談支援センターの相談員などの仕事をしてきました。特別支援教育というと、何か特別のことをするように思われますが、その子に取って分かりやすい情報提供の方法や、暮らしやすい生活環境などをどうしたら作っていけるのかを考えることが大切なのですね。これが実は、多くの人々に共通のことだったりもします。

現在の研究テーマは、「集団参加に難しさをかかえる児童生徒の理解と教育的支援のあり方」に関してです。

特別支援教育臨床実践センターは、共通講義棟（F棟）の1階にあります。どうぞ気軽にお話をしにいらして下さい。

大切なのは「楽しむ」こと

京都市立明徳幼稚園教諭　佐　藤　菜々子
（幼児教育専攻　平成17年度卒業生）

私が京都教育大学を卒業してもうすぐ2年がたとうとしています。今はもうすぐ一年生になる子どもたちと毎日一緒に走り回り、大好きな歌を一緒に歌い、楽しく過ごしています。大学と京都市教育委員会が提携しておこなっていた学生ボランティア事業で、京都市立幼稚園にボランティアに行かせていただいていたことが、今の私の保育の基盤となっています。毎日の保育をそばで見せていただいて、子どもたちと毎日触れ合って…そのたびに、必ずこの京都市立幼稚園で働きたいと強く思いました。

教師には、見習い期間がありません。1年目の先生はたくさん研修がありますが、それでも1年目から子どもたちの立派な「先生」なのです。大学時代をいかに充実してすごしているかが現場に出てからは本当に大切だなと感じています。大学にいる間は、授業は楽しく過ぎていきました。みんなで鬼ごっこをする授業、泥だんごをぴかぴかに作る授業、動物になりきる授業、歌を歌ったり劇遊びをする授業…。何度も「じゃがいも！」と言われた泥だんご作りや、みんなで大笑いしながら劇遊びを考えたことをよく思い出します。今思えば、あの授業を楽しむ中で、幼稚園教諭になるための大切なものを手に入れていたのだということに気付きました。一番大切なのは、先生も子どもと「一緒に」楽しむこと。子どもの気持ちになって生活を一緒につくっていくということ。知らず知らずのうちに、子どもと同じように楽しむ感性を、大学の間に養っていたようです。今、毎日毎日が忙しく過ぎていく中で、子どもたちから手紙をもらったり、子どもの成長を実感したり、「せんせいだいすき！」の言葉を聞いたりすると、本当にこの仕事に就けてよかったと心から思います。生活するためだけに働いているわけではない、子どもたちの成長を見守っていく立場にあり、自分のしたい仕事をしているということを誇りに思います。子どもたちと一緒に、毎日を精一杯楽しんでいこうと思います。

『遊び』の大切さを学んだ大学生活

神戸市立東灘のぞみ幼稚園教諭　岡　崎　直　子
（幼児教育専攻　平成18年度卒業生）

子どもは「遊び」の中で、様々なことを学んでいきます。人間が生きていく上で「遊び」がいかに重要であるかということを、私は大学生活の中で学びました。

とにかく賑やかで、個性豊かな幼児教育のメンバー。少人数であるからこそ、先生方との距離も近く、「自分らしさ」を思いっきり発揮して学ぶことができました。実践的内容の授業が多いことも特徴の一つで、歌ったり、踊ったり、即興で劇をしたり、鬼ごっこをしたり…と、まるで子どもの頃にかえったように夢中で遊ぶ自分がそこにいました。今、教師として、子どもに接し、子どもが心から楽しめるような保育とはどのようなものなのかと考える時、自分が授業で経験してきたことと根本的に繋がっていると強く実感します。

また、実習や各種行事をはじめとする子どもたちとの交流は、学科のメンバーの結びつきをより強固にしました。なぜなら、その1つ1つが、よりいいものを作り上げるための自主性や皆との協力性が求められたりするものだったからです。例えば、実習お別れ会での「ジーニーのマジックショー」、納涼大会での劇「ぐりとぐら」、ラインダンス「ロックンオムレツ」は、皆がそれぞれの得意分野を生かし、脚本を書いたり、道具を製作したり、踊りを考えたりして、自分自身も楽しみ、高め合いながら作り上げることができました。時間をかけて練習を繰り返した結果、子どもの最高の笑顔にあえた時の達成感は言葉では言いつくせません。自分が楽しいと感じることができたことが、子どもにも伝わったのだと思います。子どものために一生懸命になることの大切さは、教師になっても、忘れないようにしていきたいことの1つです。

本当に充実した素晴らしい4年間を過ごせたのは、共に学んだ友達と、温かく見守って下さった先生方のお陰だと思っています。のびのびと、真剣に、「遊び」の大切さを学べる京都教育大学の温かな雰囲気に感謝します。

自然科学史の真実を探求して学ぶ教育

京都教育大学同窓会理事長・名誉教授　松　井　榮　一

はじめに

私は、昭和28年3月、京都学芸大学の第一期生として卒業し、すぐに母校に奉職させて戴きました。

大変有難いことに、物理学教室と教授会の先生方の御配慮によって母校現職のまゝ京都大学大学院理学研究科固体分光学研究員として、昭和32年4月から10年間にわたって、京都大学大学院内田洋一先生のもとで御薫陶を受け、昭和42年3月この研究によって京都大学から理学博士の学位を授与されました。

内田先生の多くの教えの中で、「百年後にその論文が読まれたとき充分な信頼が得られる内容・精度に達してから論文にまとめて発表しなさい。」という教えと、「その研究対象をはじめて見出した先人の業績をくわしく調査し、論文の原文を精読し、その後の進展を自分で追体験した上でこれを更に充実・進展する研究成果を挙げなさい。」という教えは私の心に深くきざまれて現在も努力を続けて居ります。

スーパーサイエンス・ハイスクールについて

私は、現在京都府立洛北高等学校・同附属中学校の学術顧問と、この学校に設置されているスーパーサイエンス・ハイスクールの運営指導委員会委員を、元京大総長西島先生、本学副学長丹後先生、京大理学部上野先生・山極先生などの先生方とご一緒に勤めさせて戴いて居ります。

このスーパーサイエンス・ハイスクールは我国の将来の国際的な科学技術系人材の育成を目指して文部科学省が設置しているもので、平成19年度現在では、全国約5400校の高等学校の内の100校、京都府では、国立本学附属高校、府立洛北高校・同附属中学校、市立堀川高校、私立立命館高校の4校に設置され、それぞれ特色ある教育が進められています。

自然科学史の真実を探求して学ぶ教育

私は、この京都府立洛北高等学校・同附属中学校のスーパーサイエンス・ハイスクールにおける教育の一つの柱として「自然科学史に学ぶ」という事項を提言し、毎年この課程の開講講義でお話ししていますが、生徒の皆さんがその趣旨を正確に理解してもらっています。

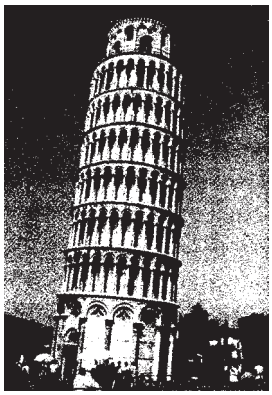
その基本は、（1）自然科学史上の人物が、大自然の偉大さをどうして理解しようとしたのかの真実を探求すること。（2）自然科学史上の事柄を「昔に起こったこと」としてではなく、「人類の一員としての自分のこと」としてとらえること。（3）「自分が新らしい自然科学史を礎いて未来への贈り物にすること。」で、これは内田先生の教えを基にして発展させたものです。

この開講講義の第一回で、「アリストテレスとガリレオ・ガリレイの求めたもの」としてまとめたものの基本の概要を記してみましょう。

自然科学史の書物には普通「物体の落下の現象について、アリストテレスが観念論で『重い物が軽い物より速く落ちる』としていたのをガリレオ・ガリレイがピサの斜塔で実験を行って『重い球と軽い球とが同時に地上に達する』ことを証明した」と書かれています。

このことについて、私が「自然科学史の真実」を求めて現地調査を行って得た事柄は、先ず、アリストテレスが「重い物は軽い物より速く落ちる」としたのは単なる観念論によるものではなく、水や油の中で実験を行った結果に基いたもので、このような流体中では同じ直径の球体形で質量の異なる物体間では重い物体が軽い物体より速く落ちるのは事実で、アリストテレスの時代（紀元前384年～321年）としては精度の高い実験結果に基づいた考察といえるでしょう。

次に、ガリレオ・ガリレイの実験について、イタリアのピサの斜塔（写真は昭和57年著者撮影）に実際に登って調査し、公文書館の文献もくわしく調査したところ、ガリレオ・ガリレイの記録には、「重い鉄球は、手の指3本の幅程だけ軽い鉄球より速く地面に達した。この差は空気の抵抗によるもので、もし空気の全くない場（真空状態）でこの実験を行うことが出来れば、重い鉄球も軽い鉄球も全く同時に地上に落下するであろう。」と極めて正確な実験結果とその考察とが述べられています。



そしてこのガリレオ・ガリレイの願いは、彼の弟子であったトリチェリーとヴィヴィアーニによって、いわゆる「トリチェリーの真空」の実験の成功を基にして1643年「真空のガラス管の中を鉛の玉と鳥の羽とが全く同時に落下する」という実験の成功によって確認されました。

この探究によって普通の自然科学史の記述とは格段に内容豊かでレベルの高い自然科学史上の人物の真実が明らかになったわけで、このような探求心と実行力を未来を担う人たちに伝えてゆきたいと考えています。

第 121 号の読者の皆さまへ

KYOKYO をお読みいただきありがとうございました。
より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。
広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522
京都市伏見区深草藤森町 1 番地
京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」
E-mail：kouhou@kyokyo-u.ac.jp

121 号編集後記

広報 121 号をお届けいたします。本号の特集は『連合教職大学院』の発足についてです。平成 20 年度 4 月から本学に連合教職大学院が開学します。この大学院の一番大きな特徴は、私立 7 大学との連合でつくることで、これは来年度発足する 19 の教職大学院のなかでも唯一の大変ユニークなものです。京都の地にあって京都の教育に貢献しようとする大学が国私の壁を越えて集まって出来た新しい大学院に、教職への強い意欲をもつ学校の先生方や若い学生の皆さんが入学されることを期待しています。

なお表紙は附属京都小学校の園祐貴（その　ゆうき）さんの作品です。様々な素材を使って刷り上げられた、生き生きとした版画作品をお楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長　武蔵野　實

京都教育大学

地域連携・広報委員会

委 員 長　武蔵野　實
副委員長　谷口　淳一
委　　員　広木　正紀　田中　里志　浅井　和行　樋口　とみ子
村上　忠幸　香川　貴志　村田　利裕　宇野　和樹
事務担当　企画広報課

京都教育大学広報 第121号

発行日
2008年3月25日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
http://www.kyokyo-u.ac.jp